



鐵舟

Tesshu

vol. 74

2025 夏
(令和 7 年)

鉄舟禅会ホームページ



鉄舟 再復刊第七四号 目次

臨濟録提唱抄録 (四)	・ ・ ・	垣塚 玄了	2
的翁老大師再録 (二)	・ ・ ・	大森 曹玄	5
鉄舟会の禪風	・ ・ ・	齋藤 健	12
天龍僧堂安單後記	・ ・ ・	岩立 実勇	16
第二維新運動の系譜 (二)	・ ・ ・	猿渡 知之	24
深層意識を拓く	・ ・ ・	大森 悠生	28
諸事一考	・ ・ ・	高柳健次郎	37
人間	・ ・ ・	補修報告	37
表紙のリニューアルにつきまして	・ ・ ・		
高歩院	・ ・ ・		

趣旨

我々同人の誓願は、要するに正見の体现であり、その生活化である。正見とは無我の正覚に外ならない。これこそ、そしてこれのみが、人生の唯一の指導原理である。何人と雖もこれなくして人生を正しく生き得るものではない。

われわれは、この誓願ゆえに、久しく鉄舟会に拠つて互いに切磋琢磨してきた。

いまはこの誓願ゆえに、その正見を各自の専門の道を通じて表詮しようと思ふ。禪に、書に、画に、剣に、そして詩に、もとより正見それ自体は絶対的な道理の眼である。ではあるが、一面それは邪見と相対的な境位をも含むものである。その立場においては、われわれは邪見に対しては仮借なく折伏してゆこうと思ふ。

われわれのこのささやかな営みが、願いの彼岸に果たしてよく達しうるか否かは、ひとえに同憂の高士の賛助による外はない。希くば絶大の庇護を賜らんことを。

信条

- 一、われわれは、自己と世界についての正しい見方(正見)と、正しい生き方(正精進)即ち無我の正覚に立つて万世のために泰平を開くべき自覚と責任とを明らかにしよう。
- 二、われわれは安易な妥協を排し、孤高真実の道を独往するともに、あくまでも師承を尚び、道交を厚くし、万物一体宇宙共生の真理を実践しよう。
- 三、われわれは一切の悪に対しては仮借なく折伏するが、徒らに世事の非に激して焦燥に陥ることなく、一面風雅の道に道達するゆとりを養おう。
- 四、われわれは、自己を真実人体として現成すべく、日常つとめて打坐し、姿勢を正し、呼吸を正し、想念を正し、自己の周辺から漸次世界を正化しよう。

鉄舟禅会同人

臨濟録提唱抄録（四）

提唱 垣堺 玄了老師

抄録 齋藤 健

一般の禿比丘有って、学人に向かつて道う、仏は是れ究竟なり、三大阿僧祇劫に於いて修行果満して、方に始めて成道すと

道流、爾もし仏は是れ究竟なりと道わば、什麼に縁ってか八十年後、拘尸羅城の双林樹の間に向いて側臥して死し去る。仏は今何にか在る。明らかに知んぬ。我が生死と別ならざることを

汝言う、三十二相八十種好は是れ仏なりと。転輪聖王も応に是れ如来なるべきや。明らかに知んぬは是れ幻化なることを

古人云く、如来拳身の相は、世間の情に順ぜんが為なり。人の断見を生ぜんことを恐れて權に且く虚名を立つ。仮に三十二という八十もまた空声なり有心は覺体に非ず。無相乃ち眞形と

（意訳）

坊さんが「お釈迦様は気の遠くなる間、生まれかわり死にかわり修行して、ついに仏様となつてこの世に現れてくださった」と云う。しかし、八十歳でお亡くなりになった。

また、仏様は普通の人が持たない立派な相好を持つと云う。しかし、世の中を見渡すと、立派な人相でも「エッ、この人が」ということがある。

仏様のイメージを持つことは人情としてよくわかります。また、お釈迦様の次に如来が出現され我々を導いてくださると思うのも人情でしょう。

しかし、禅宗の見方は違う。そのような人情を一度拭い去り、無相となつたところに眞の姿眞の仏様を見ると考へるのです。

（提唱）

三月二十三日（二〇二五）の朝日新聞朝刊に、「無宗教でなぜ占い？ 見いだした価値 スピリチュアリティで『自分』

肯定」という記事が掲載されていました。一部転載いたします。

「日本人は無宗教と言われる」「しかし、それでも初詣には行き、葬式では手を合わせる。宗教と意識はされないが、科学的ではない占いやパワースポットを信じる人もいる」「かつての宗教は、教団という共同体への所属で信者に安心感を与える面もあったが（占いや瞑想法などの）「スピリチュアリティ」は所属の要素を限りなく減らし実践に特化した宗教と言える」「宗教学者の伊藤雅之さんによると『サラダバー型宗教』とも表現されるといふ」

「伝統的な宗教は、教義の体系をパッケージとしてそのまま受け入れることを信者に求めた。しかし、身体の実践に特化するヨガなど、宗教のうち好きなどころだけを選び取ることが好まれるようになった」

「近年のスピリチュアリティは「ありのままの自分」を肯定しようという傾向が顕著だという」

「合理的なものでは軽減できない不安に応える非合理的な機能を宗教は担ってきた。人間に根源的な不安がなくならない限り宗教はならない」

宗教学者は宗教の要素を三つに分けているようです。「信仰」「所属」「実践」です。そして「信仰」と「所属」（帰属意識）がなくなってきた「実践」だけになっているようだと言っています。

この記事では「推し活」も現代の宗教の一つだと言っております。グループとしての統一された動きをする。そういう「規範」を「実践」していることに対して安心を見出しているのです。

考えてみてください。わざわざこの道場に来るといふことは、面倒くさいでしょう。しかし、面倒くさくても皆さんは来られる。オンラインと道場に行くのはそれぞれメリット、デメリットがあります。

しかし、わざわざ出かけて行ってやるのには何かあるのでしょうか。それが、一番最後に書いてあるところなのです。

「有心は覺体（しぎたい）に非ず。無相乃ち眞形」と

何かに縛られるというのは嫌なことです。私も人に縛られるのは大嫌いです。縛られたら動きが取れないわけです。僧堂にいて二十四時間監視されていて、規矩も厳格に決ま

つていれば、もう一切合切、自分勝手なことではできません。すると、無相にしかならないのです。自分が無くなってしまうのではなくて、あつたら動けないから、無いのです。鉄舟会でも、よく「みんなと同じ」ことをする」と、言うのです。

世の中では、「みんなと同じ」ことをするな」「自分のオリジナリティを出せ」と言われるのですが、ここではその逆。みんなと同じ事をやる、オリジナリティを出すなどと言う言うわけです。それがこの「無相」です。

全く自分が出てこないという状態。臨濟禪師はそこが「真^{しん}」だと言ってるんです。「有心」というのは逆で、自分があるということですから、「こっちの方がいいな」、「あつちの方が楽だな」と、サラダバーのようにして、お好みで摘み取っていくようになってしまいます。

修行しているつもりだけれど、そこにあるのは自分の「我^が」です。自我ばかりが出てる。

だから「覚体にあらず」、いつまで経っても物事がわかったというにはなりませんよと言ってるのです。

もちろん我々はオリジナリティを出して自分の人生を全うして行きたいです。だから、臨濟禪師は一生これをやれと言ってるわけではないんです。そうではなくて、一度はそういうところに自分を押し込んで、自分のないところを見

て、自分のないところが真形だというふうに把握してから「有心」に戻ってこいと。こう言っているわけです。

「有心は覚体にあらず無相すなわち真形」、実は修行が終わっても、この通りなんです。特にこれから本当のところをつかもうという時には、やはり一度自分をガラガラつと落とさなければいけないのです。

西郷さんが鉄舟さんのことを評して「命もいらす名もいらす官位も金もいらぬ人は始末に困るもの也」と言った。山岡鉄舟さんはパワーとは関係ないところにいるわけです。「有の人」と「無の人」が拮抗しあつて行かなければ、世の中は、おかしくなってしまうす。

こうやつてわざわざ時間を作つて坐禅会にやつて来る皆さんお一人おひとりがそういう要素を持つてるといふことです。

だから、ぜひ自分の問題を解決して、世の中に貢献をしていくような人になつていただきたいと思ひます。そして自分もそうしなければいけないと改めて思ひます。

(二〇二五年四月十九日)

的翁老大師 再録（一）



来年三十三回忌を迎える高歩院第三世・大森曹玄老大師を偲び、鉄舟禅会初期の玉稿を再録します。第一回は、昭和三十年ころに仏教誌「大乘禅」に掲載された文章をお届けします。

鉄舟会の禅風

大森 曹玄

一、由 来

鉄舟会とは、先師精拙和尚が、昭和十八年に中野区小淀町の成趣園即ち山岡鉄舟先生の旧邸趾（当時伏見宮別邸）に先生の諱に因んだ高歩院という小寺を創建され

て以来の禅会である。

昭和二十年十月、先師が遷化されてから、現天龍寺管長関牧翁、現花園大学長山田無文の両老師が、毎月交替で京都から上京されて指導に当たっていたが、昭和二十二年、私が住職してからは私の責任において経営運行されている。

会の構成は、元玉井汽船会長納賀雅友さんが、精拙和尚の旧門下を代表して理事長、他に十二名の理事があり、その中の六名が常務理事、その他に石井光雄、石井光次郎、井田磐楠、松本洪、横山雪堂、関牧翁、山田無文、真崎勝次、安岡正篤、福原俊丸等十名の顧問がある。そして松本顧問が漢籍、横山顧問が書道、阪本理事が画、山田理事が刀剣、私が禅とそれぞれ分担して指導に当たっている。機関誌「鉄舟」は森田理事が編集する。

「信条」というものが四カ条ほどある。それは

一、われわれは、自己と世界とについての正しい見方（正見）と、正しい生き方（正精進）、即ち無我の正覚に立って万世のために太平を開くべき自覚と責任とを明かにしよう。

一、われわれは安易な妥協を排し、孤高真実の道を独往するとともに、あくまでも師承を尚び、道

交を厚くし、万物一体宇宙共生の真理を実践しよう。

一、われわれは一切の悪に対しては仮借なく折伏するが、徒らに世事の非に激して焦燥に陥ることなく、一面風雅の道に逍遙するゆとりを養おう。

一、われわれは、自己を真人人体として現成すべく、日常つとめて打坐し、姿勢を正し、呼吸を正し、想念を正して、自己の周辺から漸次世界を正化しよう。

というのである。

鉄舟会は禅会でありながら、刀剣美術の研究鑑賞をやり、書画の練習製作をやるなど、いわば排すべき雑業を行っているのではないか、と言われるかも知れない。たしかにそれらは雑業に相違ない。けれども私どもは、それらを一面風雅の道としても修めるが、もつと端的に言えば他の手段を以てする坐禅としてやっているのである。その理由は最後まで読んで頂けば、御諒解願えるのではないかとおもふ。

二、師 承

東嶺禪師は「宗門無尽燈論」において特に「師承」

の項を設けその重大性を論じている。「向上の一著地に随てよりこのかた師承を貴ばず、自悟自見互に邪正を論ず、己が智分を恣にして古人に本かず」と嘆き、また「師承を捨てて自ら求むべからず、自ら求て得るは真の九十六種の眷属なり」と指弾し、そして「師の一事、最も省要」であることを強調している。

先師精拙和尚は十七歳にして天竜僧堂に掛塔されたが、一年目の制間に懐しの故山但馬に帰省し、まつ先きに恩師北隠和尚を正法寺に訪ねた。一応の挨拶がすむと北隠和尚は「お前の就ている僧堂の師家は何という方ぢやな。」と尋ねた「はい 峨山和尚と申します。」「ほう峨山。聞いたことのない名ぢや。いづれ若手に違いない。

誰の法嗣じや」「存じません」

すると北隠和尚は悲壮な顔をして「なに、自分の就ている師家の法系を知らぬ。ああ、お前は何という修行をしてきているのか。こんな情ないことはない。」と言つて大声を張り上げて、男泣きに泣かれた。若き日の精拙和尚は大いに恥ぢて直ちに京都へ引返し、僧堂に帰つて師の法系を明かにしたということである。このため精拙和尚が師家となつてからの天竜僧堂では、朝課の劈頭に通代伝法の名号を読む習わしになっている。

私は青年時代、居士として原田祖岳老師に参じ、見性を許された鴻恩をつねに拝謝しているが、肯心自ら許さず、更に天童精拙の炉竈に入り苦修八年、どうやら初関を透ることができた。精拙和尚が僧堂を法嗣牧翁和尚に譲られてからは、私も譲り弟子として牧翁和尚に参ずることになった。

この法系は言うまでもなく滴水下の正系で、滴水、竜淵、精拙、牧翁と伝法されたものである。今後の禪の在り方について私自身若干の意見ももっているが、この意味で私の禪はあくまでもオーソドックスのそれである。

殊に昭和二十年敗戦ののち、先師遷化の数日前、はるばる東京から訪れた私を病床に引見した先師は、私の手を握り、みずから杯に酒を注いで、「ここ半年の間に全国民に八絃一字の本当の精神を徹底させなければ日本の復活はできない、俺の代りにそれをやってくれ。」と涙ながらに語られたが、何ぞはからんそれが私に対する遺言になってしまった。

その翌年、四十三歳にして私は僧籍に入ったが、今後の私の生涯は一にこの時の先師の遺命に基いて生きて行く外はない。先師の言われた八絃一字とは当時の常套

語であるが、その真意は一切衆生、悉有仏性の正覺に基く「一つの世界」を平和的に現成すること、これを帝國主義的征服を意味するものとしたのは、自他ともに甚だしい曲解である。

三、主 張

かくの如く滴水下のオーソドックスの禪を挙揚するわが鉄舟会は加うるに高歩院開基たる鉄舟先生の精神をも願慮しなければならない。

なぜならば、先師精拙和尚は高歩院建設資金を勧進する辞の中に、次のように述べているからである。

「乃ち一茎草を挿んで鎮国山高歩院と名づく」ところの「鎮国の道場」を建立せんと発願して茲に広く同信同願の士に助力を求めるのだが、それは「興隆仏法の爲めに非ず、造寺度僧の願に非ず、唯居士（鉄舟翁）が尽忠至誠の眞精神を体し、後進のために育英の道場となし云々」とあるのがそれである。

この小院落慶の日、先師は一偈を打して祝語として
いる。曰く

茅庵を磐結し高歩に倣う

園林趣を成して千祥を發す

竜池攀出す円通の境

永く安禪鎮国の場と作さん。

鉄舟先生は自ら書き残しているように、剣道以外では禪に心血をそそいだといわれる。在宅の時と旅行中とを問わず、夜は必ず坐禪をされ、深更二時に及ぶのが常だったという。しかもその坐り方は実に猛烈を極めたものであった。

若い頃の先生はボロといわれたほどに貧乏だったので、邸は全く荒れ果て鼠が昼夜を分たず暴れ廻っていたらしい。

ところが、ひとたび先生が坐り初めると、その鼠どもがピタリと鳴りをひそめてガタリともしなかった。夫人がそれを不思議がつて先生に話すと先生は「わしの禪は鼠のカカシが相場かな。」と言つて笑われたという有名な物語がある。

滴水和尚は、先生の参禪をきくたびに脂汗を流したというから、坐るにも参するにも真剣を振りかざして強敵に迫るような猛烈の気迫と、必死の覚悟とがあつたものとおもわれる。滴水和尚自身、鉄舟先生の参禪をきかれることによって「柄はそのため大いに力を得た」と、後に述懐している。また滴水和尚の法嗣竜淵和尚は、師

の滴水が鉄舟を鉗鎚すること三年のち京都に帰つたとき、「顔に昔日の面影なし。」と評している。師は弟子を鍛えたが、弟子はまた逆にその師を鍛えたのである。

私は鉄舟先生のこの激しい捨身の坐禪を取入れ、これを仁王禪と唱えている。

鉄舟先生も晩年には写経などしていると、鼠が出てきて肩や手に上つて遊び戯れたというが、それはすでに円融無礙の境に入つたときの姿であつて、若い修行時代のそれではない。

私は世の宗教家の多くが、初心の者に対してすでに出来上つた閑古錐の境地を強いるようなやり方に甚だ不満を感じている。例えば十牛の図でいうならば、まだ尋牛の位にいる者に、入塵垂手の境を強いても、百害あつて一利もないのと同じである。尋牛、見迹の段階には、それに相応しい手段が取られなければならない。私はそれを坐り出せば鼠もいなくなるような、凜然颯爽たる仁王の機だと主張したのである。

仁王禪という名詞の出故は、もちろん天正武士の典型ともいふべき鈴木正三の唱導によるものである。彼は歴戦の体験から、槍をひねつて百万の大軍中に突入するような気持で坐れと教えている。「機をひつ立、眼をす

え、仁王、不動、悪魔降伏の形像の機を受け、仁王の心を守って悪業煩惱を滅すべし」といい、もっぱら「勇猛堪固の大威勢」を張ることを強調している。

正三老人はまた「近時仏法廢れ果て、すべて悪しく成て、活きた機を用る者なし。」とも嘆いているが、彼の生きた戦国から程遠くない時代でもすでにそうだったのだから、まして仏法のカケラすらもない現代に仁王禪などと言ったら氣狂い扱いされるかも知れない。けれども鼠のカカシにもなれないような無氣力な坐禅で、どうして生死のきつなが断ちきれようか。

もちろん仁王は御本尊の観音仏の入口に立ったもので、仁王の門をくぐったら、堂の奥に入って観音様に相見し、観音様と人我々入した円満柔和な境界―晩年の鉄舟先生のように鼠も肩や手に上つてきてたわむれるくらいにならない。古来、本当に観音様に相見した人は、まず、仁王門から入ってこいと教えるけれど、一度も相見したことのない連中は、とかく無責任な言葉をつき、一足飛びに庭先から奥座敷に上り込めるような「見てきたようなウソをつく」者が多い。

ある人が正三老人に「それでは如来坐禅は悪いのですか」と質問したら老人は「悪しき事に非ず、然れども

上手芸を初心者に授るほどに用に立ぬなり。初心の者は先づ仁王坐禅がよきなり。」と答えている。白隠和尚にも聞いて見るがよい。「寂黙枯生を死守して以て道と為す底」の黙照禅を極力排斥し、百万の大軍中に唯一騎で躍り入るような氣迫で坐れと教えている。十有五にしてまだ志を立てることすら判らぬ鼻たれ小僧をつかまえて孔子さんの心の欲する所に従う七十歳の円熟した境界を教えたり、白隠さんの罵っているように「無我無心是れ古仏」の道だなどと、聞き囁りで隠居婆さんの日向ぼつこの真似みたいな坐禅をさせるものだから、正三老人の言い草ではないが「用に立たぬ」くらげばかり出来てしまうのである。

仁王の鍛錬を経ないと、どうしても観音様も形だけのまね事になってその内実は空氣の抜けたゴム毬のようになり勝ちである。宗教家とか道德家とかいう人達には、白隠さんのいわゆる「黙照の邪党」「断無の瞎僧」、つまり氣の抜けたゴム毬の徒が多いのは、仁王の醍醐味に味到しないからであるとおもう。

しかし、どんなによいことでも、その反面には必ずしも害がないとは言えない。仁王禪に伴う弊害は、それが往々にして入力禅になり勝ちなことであろう。仁王の

機は決して肉体的な力のみではなく、精神的緊張力であり、気合であるが、そう判るまでには相当の修行がいるが、それさえ判れば、弊は直ちに救われるのである。

わが鉄舟会ではそのような意味で、全心身の力を使いまここに総動員する仁王の機を坐禪の要決として主張するものである。鉄舟会で試みる書も剣も、その一法であり且つその集中力の度合を測る鑑定法でもあるわけである。

四、展 望

禪書ブームと言われてからもう何年かになる。たしかに禪に関する書物は可成り沢山出るようにはなったが、しかしブームと呼ばれるほどのものでは決していない。

それにしても、禪の哲学的研究、科学的研究、弁証法的研究等、学究的な書物が続々と刊行されることはまことに結構な次第とおもう。だがそういった現象を見て禪が健在だと考えていること自体が、すでに禪を失っている証拠ではないだろうか。今日の状態は、黄檗禪師の言つたように「禪なしと道はず、唯これ師なし」というところではないだろうか。

そこに思いを廻らすとき、私はいつもオイゲン・ヘ

リゲル博士の「日本の弓術」を想起するのが常である。かつて「鉄舟」にもそのことを書いたが、「日本の弓術」の巻頭にあるヘリゲル夫人から「日本の知人」への回章によると、博士は自分の死期の近いことを知るや、一切の草稿を焼き棄ててしまったそうである。その心境について夫人は次のように述べている。

「恐らくこれは、窮極的なものの全汎性に対する畏敬の念からであつたのでしよう。この全汎性は言葉の中に呪縛されると体験の力を喪うものなのです。それは言葉というものの一般が重要さのないためであつたのでしよう。」

博士の心境を語る夫人のこの言葉は、われらにとつてまことに竹箆よりも恐ろしいものがある。日本の禪の関係者が禪書ブームを謳歌し、または待望しているとき、西洋の一哲学者は逆に大慧禪師が碧巖集を焼いたように、窮極的なものを言語文字の呪縛から解放すべく、その草稿を一炬に付したのである。しかもヘリゲル博士は

「禪が今まで思いもよらなかつた人間実存の方引を生み出すだろうという事、そして更にこの方式に対し洞察を加える事は、如何程高く評価されてもなお決して十分ではない。」とまで禪に期待を寄せているのである。われ

われ禪者たるもの、まことに愧ぢなきを得ない次第である。

禪がアジア的停滞の枠を脱して博士の言うように今まで思いも寄らなかつた人間実存の方式を生み出せるなら、いまや世界史の問いが人間とは何であるかとの根源的課題にふれてきているとき、歴史の転換に偉大な貢献をすることが出来るとおもふ。生命は最も古くして、最も新しいものなるが故である。更におもふ。かつての日、わが天竜寺開山夢窓国師は政治的には南北兩朝の対立を高い次元で平和的に統一することに苦慮し、身をもつてその媒体たらんとし、社会的には両朝葛藤の戦争犠牲者の霊を慰むべく各国に舍利塔を建ててこれを供養し、精神的には一国に一カ寺の安国寺を建立して不安動揺に悩む人々に帰趨するところあらしめ、経済的には天竜寺船を出して外国貿易を行い、その利潤をもつてそれからの事業の資金に充て且つ民衆の福祉を増進しようとされた。これらのことは今日もその規模を拡大して、世界的な視野でこれを行うことの出来る問題ではないだろうか。

時代はもはやわれわれが、宗団の古畳の上に安閑として打眠禪に耽つてゐることを許さない。正に一つの世界を現成する生活禪を挙揚すべき時である。思つてこ

に至ればつねに先師の遺囑は、私の懶怠を強く鞭うつのである。活禪興れ。活人出でよ。わが鉄舟会もまたその驥尾に付して、応分の力を致さんことを誓うものである。

衆生無辺誓願度。



天龍僧堂安単後記

齋藤 健

昨年十一月の天龍僧堂の接心に参加をして参りました。期間中、暖かく見守って頂きました坂上老師、きめ細かくご指導いただいた直日様、侍者様、雲水の皆様には大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

約半年が経過したところで改めて印象に残っていること、感じていることについて振り返ってみようと思います。

知客寮にて

十五日から始まる接心の前日の午後、観光客が行きかう竹林の小道から僧堂への入り口となる潜り戸を抜けると、そこには打ち水された石畳と静寂な空間が広がっています。その向こうに荘厳な屋根の建物がみえます。

玄關に入ったら大きな声で案内を乞うように指南されていますので、さあこれからと覚悟をきめ、玄關に足を踏み入れると、既に知客寮の方が玄關廊下の床に深々と低頭して、みじりともせずいらっしやいます。これ

には正直驚くとともに恐縮いたしました。もしや、我々がそろそろ到着する時刻と、あらかじめお待ちくださっていたのか？それにしては随分とお待ちしてしまったのではないかとお尋ねすると、「潜り戸から入ってくる気配がしたので」とのこと、かすかな気配を察知して先手を打って行動される知客寮様のはたらくに初っ端からハツとさせられました。

禅堂

案内された禅堂内は想像していたより広く、天井も高く、中央には幅のある通路が前門と後門を貫いています。床は黒っぽいタイル張り。その左右が一段高くなっている、単がならんでいます。後門から入ると、一番奥の左側に老師の単、左側の一番手前が侍者単、右側一番奥に直日単があります。私たちは左側の侍者さんに近いところに単を用意していただき、そこで坐ることになりました。

履物

禅堂の外を歩くときは下駄、禅堂内の床と本堂への渡り通路を歩くときは草鞋わらじを履きます。外から戻ってく

ると禪堂の外で下駄を脱ぎますが、その場所は、雲水、居士ごとに決まっています。禪堂内への入り口の床には草鞋がそろえて並べてあり、それに履き替えて自分の単の前まで進み、草鞋を脱いで単にあがります。この草鞋を履くときも、並んでいる中のどれを履くのか、脱ぐときはどこに並べるのか細かく決まっています。

雲水の皆さんは出入りする都度、よくこの草鞋を直します。少しでも傾いたり間隔が不揃いだと思します。また、堂内で坐る人数が状況に応じて変動することに備えて、揃えておく草鞋を増やしたり減らしたりします。常に次を想定し、後からくる人のために配慮を怠りません。草鞋わらじは藁で編んだものでとても軽く、脱ぐときに足にくっついてくるので揃えて脱ぐのに苦労しました。雲水の皆さんは、こともなげにササツと足を抜き去るだけで床には綺麗に揃ったわらじが残ります。見事です。足の指先にまで細心の注意をはらっていないと、あのようにはいかないと思います。今回の接心中は最後まで雲水さんのようにきれいに草鞋を脱ぐことはできませんでした。

履物の着脱は日常の基本動作です。僧堂に限らず自宅でもどこでも、トイレのスリッパ、ベランダのサンダル

や敷物など、綺麗にそろっているのは美しく気持ちが良いものです。今も細心の注意を払うように心がけています。

次を予測し周りの人に気を配り手を差し伸べること、これは履物に限らず、僧堂において雲水の皆さんは常に随所で実践をされていると感じました。朝の開静で布団を上への棚に上げるのに手こずっていると隣の単から雲水さんがスツと飛んできて手を貸してくれます。粥坐では給仕する側だけでなく給仕される側も給仕する人を気遣って汚れた持鉢は清めて差し出すようになど、細かく指導されます。私も周りのことで気づいたら即行動できるようにならなければいけないと感じました。しかし、現実には全然できていません。「おや」と思っても、動くタイミングがつかめずそのままになることが多くあります。思い立ったが吉日で、パツと動ける自分になれるよう精進します。

坐禅

天龍僧堂での坐禅は一炷二十五分、抽解（二便往来）五分が基本とのことで、他の僧堂に比べて坐る時間は短いですがというお話がありました。しかし実際は、一日の

中で抽解をとらず足の組み替えもなしで二炷、三炷と続けて坐る時間帯が何回あります。どのタイミングで足を組み替えても良いか、二便往来して良いのかは周りの様子をみて合わせて行います。

雲水の皆さんの坐禅の姿は美しく、新到の雲水さんも含めて背筋はまっすぐでピンとしていて、お顔は正面を向いて凛としています。

今回の接心は途中までの参加でしたが二回ほど講席に参加する機会があり、本堂の大広間に出頭して阪上老師の提唱を拝聴しました。老師が提唱される間は畳の上で坐を組みます。尻の下に座布はありません。雲水のみなさんは三十分、一時間、禅堂で坐ると同じように背筋をまっすぐに立て、顔を正面にむけ、微動だにしません。これは大変でした。それまでの坐禅では尻を高くすることに慣れていたため、まっ平な畳の上で坐禅の姿勢を維持するのがつらくて長続きせず、上体が後ろに倒れそうになるので立て直すのに苦労しました。さらに、接心の二日目、三日目になると、堂内で布団の上に坐っていても体が左後ろに傾くようになってしまい、傾きを補正しようと、お尻の左後ろを更に高くしてみたりと工夫してみましたが改善せず、かえって右足の痛みが強くなる

始末。長く続けて坐禅ができる体になっていないのだと痛感しました。

これ以来、鉄舟禅会で坐る際は尻の下の座布を一枚減らし、家で坐るときは平らな座布団にそのまま坐った状態で姿勢を自力でまっすぐに維持するように心がけています。

粥坐・齋坐

いつも鉄舟会で行っている粥坐（朝のお粥）、齋坐（昼食、薬石（夕食）と基本的に同じ流れ・作法で進行了ましたので、大きく迷うことはありませんでしたが、難しいのは食事中に音を立てないことです。もちろん鉄舟会でも食事中に音を立てないことは同じですが、僧堂の雲水の皆さんの食べる量の多さ、速さ、一切コトリとも音をたてない無音の動作は破格です。私が食べる量は雲水さんの半分ほどにも関わらず周りの進行速度についていくのが精いっぱい焦って何度か音をたててしまう始末、周りへの注意力、自分の動作への注意力がまだまだ足りないと感じました。鉄舟禅会での粥坐、齋坐においても、さらに集中力を高めて取り組む必要があると感じました。次に僧堂接心に参加するときにはコトリと

も音をたてずに動作ができるよう努力しています。

指導

僧堂での作法には厳格な規矩があり、一日の行動はその規矩に則って進行します。その規矩から外れた動きがあると指導が入ります。粥坐の給仕をしている飯台看さんが手順を違えると、即座に「おいっ！」と先輩雲水から声が飛びます。禅堂内での坐禅中でも同様です。間髪いれずに指摘するには、あるべき姿を意識し、常に周りを観察する注意力が必要です。これには相当な力量が必要だと思いますが、随所でそういう場面に遭遇しました。時には同時に複数から「おい」と声がでることもあります。

一方で、居士として参加している修行者に対しては寛容で、常に随所に気を配っていただき心配していただいていることを感じました。今回の僧堂接心で一貫して感じたのは、周りの人への気配りということです。

鉄舟禅会において、あるいは職場やそれ以外の日常の活動において、自分のことだけでなく周りへの配慮に常に気を配ること、このことが私の弱点でもあり、もともとずっと気をつけなければならないと思っています。

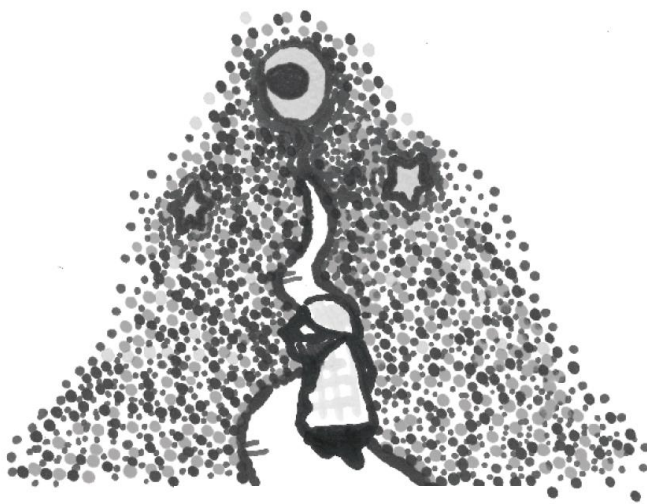


イラスト / 斎藤伊生史

第二維新運動の系譜(二)

(前原一誠、二・二六事件、大森一聲)

岩立 実勇

三 前原一誠の思想の検討

通常前原一誠の萩の変は、佐賀の乱・神風連の変・秋月の変・西南の役と続く一連の守旧土族の反乱の中の一地方の小さな事件として片づけられる。東京堂出版『日本近現代史研究事典』によれば「土族反乱は明治初期における不平土族による反政府暴動」で、その原因は「明治政府が近代化政策(開化政策)の一環として、開国和親方針や土族解体化政策を打ち出し、それらを強力に推進したこと」とされている。また長い間土族反乱の唯一の研究書であった後藤靖の『土族反乱の研究』では、土族独裁政権の確立、つまり武士の世の中に戻す目的であったと結論づけられている。尊皇攘夷運動に参加した土族が開化政策で裏切られ、旧来の特権をも剥奪されたことへの不平・不満による反政府暴動との解釈である。しかし前原等の言動や口供書に、武士の特権を取り戻したいなどとは一言も書かれていない。「初め余をして此の如き世界に化せしむるを知らしめば、豈に天下に先だ

ち維新を首唱し汗馬の勞に服せんや」と、蹶起に失敗後の前原一誠は、島根県吏清水清太郎に答えている。明治維新の結果は前原にとって納得のゆくものではなかった。前原の萩の変を含む丙子の挙は、明治維新の目指した本来の理想政治を取り戻すべく、第二の維新を首唱して立ち上がったのである。そしてそれが後の昭和維新を目指した大森一聲即ち大森曹玄老師らの第二維新運動の源流となったのである。それではなぜ前原は第二維新を首唱したのでろうか。

そこで一旦「不平土族による反政府暴動」という名札を外した上で、前原一誠の萩の変を中心に「丙子の挙」の意味を検討していきたい。

前原の考えがよく表われている次の三つの文章によって、その思想をまとめてみる。

- ①「佐々木男也宛書簡」(明治九年三月二十八日)
- ②「前原一誠口供書」(明治九年十一月二十五日)
- ③遺書「思ヒノマヽ」

前原は、政府の「要路の人々に付て其云ふ所行ふ所一つも取るべき者なしと云ふ」のではない。「只、大日本の国体と大勢とに付て論ずるのみ」①と、現政

府との最も重要な争点に、「国体」を挙げている。

我が国の「国体」については、「日本は天皇国である。我が皇国は小国と雖も、天地の中央に位置し、天子万世一統、君臣の大義は万国に超絶してゐる。」③とし、「天皇陛下は祖宗在天の靈に報じ玉ふ所以の孝道」の体現者であり、この孝道を国是と定め、「君を重しとし社稷（国家）を軽しとす」る①国体であると述べている。

また、普天率土（天下至る所）は王土王民であり、この考えを以て民を撫育しているのである③とする。そして外国の政体である「君主専制は、直に帝王の道であり」、「君民同治、共和政治に至つては、全く夷狄の道である。」③とし、我が国は固有の「天皇国」であると述べる。

但し、前原は「その国体と云ふも漫に自尊大にして外国を総て夷狄禽獣と云ふに非ず、又外国へ対し漫に暴慢無礼を加ふるに非ず」①とも云い、偏狂的な排外的愛国主義を否定している。

その上で、各国には皆固有の国体がある。外交を行う上でも国体ほど重要なものはない。わが国体を忘れて便利さのみを求めることこそ、夷狄の道である③と、

「国体」の重要性を説くのである。

そして大事なことは、「内に在ては君臣の義を明かにし（尊皇）、外に在ては内外の分を立てる事（攘夷）」①であるとしている。

ところが、日本の現状は真に貧弱である。なぜなら外国と「華美奢侈の風」を争うことを文明開化だと勘違している。政府の官吏が憂国の心がないからである。

③ また、「君の軽き臣の如く、官吏の重き君の如くして君臣の義を忘れ、根本である「綱常倫理」を棄てて末である「功利器械」を追い求め、「人心潰敗、利を見て義を忘る」惨状である。たとえ運よく富強の国となつたとしても、「人心に孝悌忠信の教」がなければ普仏戦争で敗れた富強の仏蘭西の轍を踏むこととなろう①と、憂うるのである。

わが国には少しも外国の輕侮を受ける理由はない。政府の官吏が外国に心酔し、外国と比べて落胆している理由はただ器械の巧みさなど末枝のことである③。

もし文明開化が真の公平無事の道というならば、どうして万里の海を越え来たつてその国の自然のあり様を否定し、自分の国の行為をのみ正しいとするのか。軍備を拡張し、功利を争い、巧妙な器械を制作して人々を惑

わす。要するに、文明開化は公平無事の道ではないのである(③)。

最も重要な日本固有の「天皇国」という本すなわち国体を保守した上で、「功利器械其他百技百工の末業といへども国に益あるもの悉く取て之を行ふべし」、それが本当の「開化」である(①)と断言する。

更に外交政策をみれば、日本の現状は『万国公法』でいう「半主国」である。しかし国力に強弱はあっても信義公道には強弱はない。相手国が天下の公道に背くならば、「断然交を絶するも可なり、戦ふも可なり。万戦敗れて三千五百万人悉く戦死する」のが臣子の役割であると(①)説く。

また前原は『(仏蘭西)民法』を読んで、西洋近代文明を「利の極」と言い、「国に忠厚の教なく、功利を以て最第一の教へ」とすれば「人心軽薄、聊か義理を解する者と雖も、或は利を見て義を忘るゝ者往々これ有る世の中となり、「浮薄偷安至らざるところ無き人心」となってしまうだろう。にもかかわらず政府はこのとるに足らない「民法を立て、神州の人心を維持せん」としており(①)、その為既に「功利の説盛に興り我が国の廉恥の風地を払ひ、甚きに至りては父子兄弟利を争ふ」

様になってしまっている。(②)と嘆いている。

前原は、後の民法典論争の法学博士穂積八束よりも十五年早く、『民法出デテ忠孝亡ブ』を、唱えたのである。

この最後の「父子兄弟利を争ふ」については、数年前ある大家家具会社で父と娘が経営権を巡って争いがあつたのは記憶に新しい。

前原は、この様な国体の危機をもたらず功利第一主義の「西洋近代文明」こそが攘うべき「眞の夷敵の事」であると言っているのである(①)。

四 前原一誠諫死の理由

次の六項目は、前原が、県吏清水清太郎の間に自分が諫死する理由を述べたもの(清水門弥『前原一誠伝』)であり、より具体的な政府の政策批判の内容となっている。

「地租改正は吾が二十年来の王土王民の基礎を変更することになること。西洋近代文明」「国法汎論」は国土国民制である。百度西洋近代文明に倣うにしても我が国の短所のみを捨てて相手の長所のみを取るべきである。

然るにただ国体を汚染する新法ばかりが出されている。仮令世界は氣運に従い、千變万化するも天皇に選ばれた政府に参与する者は勉めて人事を尽くして我が大基本を保守しなくてはいけない。にもかかわらず、我が宝祚（＝皇位）の尊い国体という大基本さえ改め様としている。天皇自ら改めようとしたとしても猶諫奏すべきなのに、どうして「姦才無耻」の俗吏が敢て為すことであらうか。王土を破りて国土と為すことがどうして尊皇と謂えるだろうか。」

地租改正は、萩の松陰神社宮司故青田國男氏が論じる様に、土地を金銭的な価値でしか計れないように貶めるものであった。その結果、土地の生産や風土の美を神の恵みとする伝統的感性も稀薄となり、前原の言うように「利を見て義を忘る」状態となり、村落共同体は崩壊し、日本固有の国体は崩れ、国土を破壊し、自然を汚染して憚らぬ西洋近代文明の方向へ突走って行く結果となったのである。

「千島樺太の交換の不利であること。樺太とウルップ島以北の千島列島とは、面積、資源ともに、比較になら

ないほど樺太の方が有利であり、得失相償はない条約である。これでは外国人に笑われるだけでなく、ロシアに倣つて脅迫を以て領土を求めてくることになったなら、予防の手段を講じない我が国はどの様に拒むことが出来るようか。」

「土族反乱は、戦前の社会では、その征韓論にもとづく国権主義的な主張ゆえに、大陸支配への先駆者の位置をあたえられていた。黒龍会編『西南記伝』全六冊（一九〇九）などは、その評価を代表する。」（梅原北明編『近世暴動反逆変乱史』）とあるように、いわゆる「土族反乱」の契機が「征韓論」にあつたと思われがちだが、丙子の挙においては、神風連の緒方弘國の、「既に樺太千島の如き名は交換なれど、其實強奪せられたるにて知るべし」（『獄の憂草』）の言葉にもある様に、その同盟のコンセンサスとしてはむしろこの「千島樺太の交換」こそ重要な契機となっている。

外務大丞丸山作樂が、最後まで交換論に反対し「日本の所領である樺太を露国に与え、日本の所領である千島を、改めて日本の所領とするのが何で交換であるか」（大坪草二郎『嵐の明治九年』）と主張したように、七

四〇〇〇平方キロの北海道なみの島を譲り渡し、もともと日本の版図であつた千島、五三〇〇平方キロを「交換」とするというのは土下座外交以外の何物でもなかつた。

外務卿副島種臣の交渉で、ロシアが樺太売却論に傾きかけた頃、黒田清隆の樺太放棄論が政府部内で有力になりつつあつた。明治六年五月、樺太に関する建議書が黒田清隆によりつくられたが、これには、敢えて樺太を「氣候寒烈」「土地礪确斥鹵（地味が痩せて荒れた土地）」と表現し、樺太を「無用の地」とし、また、ロシアと争わず放棄することが「上策」としている。幕府衰亡の時でさえ「祖宗の尺地」を決して寸土も棄てるべきではないと「（北緯 五十度論）に固執して一步も屈譲することを認めなかつたにもかかわらず、新政府は弊履を棄つるが如く樺太を割き、副島が「寛永十二年松前藩土村上広儀が発見して以来、わが国の領土である」と主張した千島と交換するという売国の業を行ったのである。

「要路の者が各々私党を組み意見が統一せず、その為廟議が矛盾することが多く、常に宸襟を悩ませまつり、ややもすればそれを糊塗するために、天皇陛下の權威を利用する。君臣の分はどこにあるのだろうか。」

前原が維新政府を去つたのは明治三年である。これより先、大村益次郎に宛てた手紙で、次の様に述べている。「黙して引く方然るべくと存じ奉り候：実に賞罰もなく武威もなく太平悪習の其の儘上へ人の御きげんとり二上ぬりをかけ、頗る偷安の御政事誠実の事可も無し」。前原は、中央政府の重職にいたもののなかで逸早くその欺瞞性に気付き下野したのである。

またこの点に関しては、前原党の参謀奥平謙輔もその口供書で「自分儀方向ノ形勢ヲ察スルニ、聖天子上ニ御憂慮遊ハサル、ト雖トモ、下万民塗炭ニ苦ムハ、畢竟小人在位擅ニ国權ヲ執ルニ因ルト、日夜忠憤止ムコト能ハス、維新ノ際既ニ其萌アルコトヲ察シ佐渡ノ判事ヲ辞シ是ヨリ又官ニ就（カ）ス」と述べ、早い段階で、その鋭敏な感性により、維新政府の欺瞞性に気付いていた。

「秩禄処分により士族の常職を解いた政府が閣議で、『士族が困頓してもし不平を鳴らし暴挙に至る者があれば、これを討滅するに兵力を以てする』とあるが、そもそも自分たち百万の士族に何の罪があるのか、政府がそういう心持で以て士族を制御しようとするれば必ず天下に

大乱を引き起すであらう。」

ここで注意したいのは、前原は秩禄処分に反対しているのではないのである。そもそも何の罪もなく却って維新の功労者でもある土族に対して常職を解けば不平が起るのが当然であるが、最初から「暴挙に至ればただ兵力を以て討滅するのみ」という政府の脅しともとれる非情な姿勢に対して「あまりではないか」と叫んでいるのである。これによつてもいわゆる前原の萩の変の原因が、「土族の特権が剥奪されたことに対する不平」とはならないことが分る。

司馬遼太郎は大村益次郎を高く評価するが、よく挙げられる逸話がある。「奥羽はいま十年や二十年頭を上げる氣遣いはない。今後注意すべきは西である。」と、すでに西南戦争を予想し鎮台制を敷き日本陸軍を創設した話である。神風連の樹下一雄が、「鎮台は却りて忠臣を摧伏るの為とする」と言い、後には谷干城が、「鎮台の称は支那の旧例に基づき、地方の鎮圧を目的として、起されたものである。是れでは地方人民を敵視する同様ぢや。斯かる忌まはしき形式は速に廃上し、軍備は国防の基礎に置かねばならぬ。」と言っているが、その点で

も前原が兵部大輔の任にあつた明治三年五月に「大に海軍を創立すべきの議」とした提出した建議は国内地方士民を敵とせず、外圧からの防衛を目的とし、また国際情勢をよく踏まえたものとなっている。

その内容は①彼（ロシア）曾て土耳其（トルコ）を取て地中海ニ突出し亜欧二洲を中断せんとする、英仏力を合て之に抗するを以て果さず、②近年黒龍江に沿ひ満州の地を取て我が北海道及朝鮮と境を接し、連ねて皇国支那朝鮮の北境に圧迫す、③今若海に突出して良港を得海事を整備するときは其大欲終に制止すべからず、とある。①ではクリミヤ戦争の状況が記され、これを受けて②にあるように、幕末以来のロシアの南下と北海道と朝鮮の危機が問題となつている。その上で③のように、ロシアがもし「良港」を得たらロシアの南下は止めることができない、というのである。「良港」すなわち、この状況下では、ウラジオストクの軍港化を指しているのである。前原はロシア問題という極東情勢を視野に入れ、海軍創立の急務を訴えたのである。（麓慎一「幕末・維新期の日本史研究と極東状況について」）

更に前原はこの建言書であくまでも自衛の為の軍備を強調している。曰く、「皇国御維新の時に当り、宇内

の情勢に随ひ、外国交際日々に開かせられ候に付ては、片時も護国至急の海陸軍を嚴備し、対立の勢力を張せられず候ては、平時は輕侮を受け、戦時は敗衄を取ること目前に候」、そして陸軍については、「陸軍を整備し、依て民土を保護するの権力を養成」すべきと述べるとともに、「軍備なければ国其民を護り安全ならしむるを得ず」としている。「地方人民」への眼差しにおいて大村との差は明らかである。続いて「国の軍備独り其政府を保護するに非ず、其全国を安全する備なり。」と述べ、軍は「政体」を護るものではないとしている。

「政府の高官として政權を握りながら、私利を貪り、豪商と結託し米価を操作して利益を得る、これこそ民權を蹂躪していることになりはしないだろうか。」

中央政府を見渡せば、大隈重信、井上馨、山縣有朋、黒田清隆。皆財閥と結託しあるいは収賄をし、贅沢な生活をしているではないか。それでいながら政府には金がないことを理由に、後述する前原が越後で行おうとした年貢半減はいかん、信濃川の分水工事はいかん、では納得できないのは当然のことである。

そもそも前原は、金銭への欲、「利」には恬淡としていた。越後府判事時代、前原が役宅としたのは市島春城（早大初代図書館長）の生家の隠宅であつた。当時、小児であつた春城（謙吉）の回顧録によれば、前原は毎月の俸給の包を封も解かず、他の文書と一緒に放り出してあり、金を無心に来る人間に、「そこらに包んだ金がある筈、それを持つて往け」という調子でその者達に捜させた。ために、無心する者達も、幾包も誤魔化して持ち去るという始末で、前原が帰国（上京の間違いか）する時には旅費すら無かつたので、春城の家で弁じたという位である。

「征韓論は無名の師でなく朝鮮の不逞を責めるのである。今の『万国公法』のまかり通る世界で、恩情を示して朝鮮を独立国とさせれば、清国も露国もこれを狙うだろう。そうなれば反覆常無き国情の朝鮮もまた我が国を敵視するであろう。それでは一属国を失い三敵国を得る様なものである。すぐにその罪を問う軍を以て朝鮮を古代と同様日本の版図に復さしめて、不平等そのものである『万国公法』を正すべきである。」

まさに、日清・日露両戦役が朝鮮半島問題を理由に戦われ、不平等条約を改正し得たことを考えれば、その時代を先取りした民族の触覚としての鋭さを確認できよう。「反覆常無き国情の朝鮮」の弊害は、現在に至っても南北朝鮮によつて引き起こされ、日本は悩まされ続けている。

但し、前原は、外交において相手が西洋だろうが朝鮮だろうが、それが「信義公道」に適うか如何を問題とし、それに相手が背かば国交を断つべきであり、万戦敗れようと戦うべきであると述べるのである。

前原が、奥平謙輔に起草させた檄文をはじめとする対外的に発した文書は蹶起の趣旨を次の様に述べる。こうした「神州（国体）の危機」は、維新以来、「太政大臣三條實美以下数十名の大吏鄙猥の資を以て頭榮の位を竊み」、「結党して朝廷を欺き」、「名は君を奉ずと謂、其実は之を幽」して、「盗賊の心を以て収斂苛刻の政を行ひ海内を培克（厳しく税金を取り立てること）し尺寸餘り為」く、上天子より下々民に至る迄、困窮切迫に至る所な」い状態を招いているからである。そしてこの様な状態は「天誅赦さざる所神人同じく憤る所」であり、

「我等天子の粟を食ひ、万民の上に立ち、寤蹙の至り忽視に忍びず」、「同志の士申し合せ、山陰道を経、禁闕の下に追々精実の心を以て 天子を諫め、諫めて御採用之無き節は一死以て之に繼ぐの決心」で蹶起したのである。それはあくまでも「憤を賊吏に発し以て聖徳を海内に明かにせんと欲する」からであつた。

（続く）



前原一誠

深層意識を拓く

猿渡 知之

私達は生まれてから、眼や耳や鼻などで把握した感覚に、既存の文明体系に従った言葉・名前を当てはめながら覚えていきます。山を見た、茶碗を触ったという経験には、眼や耳などの感覚器官の経験だけがあるのですが、山や茶碗が見えている状態でこの世界に実在すると信じています。また、「眼」は「私の眼」であって「私」が見ているのだと判断し、「私」という存在もこの世界に実在することが当然の前提となつてきます。

しかし、茶碗は割れると、ただの破片になります。破片は碎けば粉になります。粉も分子・原子・素粒子にまでやがて分解され、眼に見えなくなります（エントロピーの法則）。山ですら、日々、土は削られていきます。木々や草も変化しています。一瞬・一瞬変化しています。私達はとりあえず「山」があると見做して暮らしているのです。私達の身体も、実は、約三十七兆個の細胞によって構成され、一瞬・一瞬細胞が死に新たな細胞が生まれるという新陳代謝が行われており、一瞬・一瞬違う物体なのです。

私達は、言葉によつて「リンゴ」あるいは「私」という存在を固定的に捉えますが、実は何らかの宇宙のエネルギーによつて「リンゴ」や「私」という塊に凝縮された素粒子の集まりに過ぎなくて、一瞬一瞬変容しているわけです。世界的な言語学者である井筒俊彦は、言語によつて意味づけられた「リンゴ」や「私」には、本質があり、その本質によつて「非リンゴ」や「非私」と区別できると信じて私達が生きていることを示唆します。そして、「リンゴ」を食べる「私」という物語が生まれ、「リンゴ」や「私」が固定的に実在するように思つていくということなのです。

私達は、様々な体験をする度に、美味しかった、不味かった、好きだ、嫌いだ、などの反応経験を蓄積していきます。家庭や学校などでの教育でも、良いこと・悪いことが埋め込まれていきます。嫌いだと埋め込まれた人に出会うと自然に避けたいと思うのは、これらの反応経験に照らした反射効果に過ぎないのです。これらの反応経験の蓄積が「経験的自我」を構築するのです。長い間、狩猟生活を続けていた人類には、貧富の差など、恐らく無かったと思いますが、農業社会の発生以降、私達は食料などを蓄えることができるようになり、「富」という

概念も発生してきたのではないかと、思われます。このような環境の変化もあり、欲しいものは何か、良いものは何か、という反応経験も変化して、経験的自我も変わってきたのではないかと、思われます。

経験が先にあつて自我が後から形成されることを西田幾多郎は「善の研究」の序において、「個人あつて経験あるにあらず、経験あつて個人あるのである」と記しています。この場合の経験は「純粹経験」とされています。なぜ「純粹」かと言うと、私達が色や音を経験したと思つた段階では、既に、この色やこの音は何であるかなどという判断が加えられているのです。あれこれ解釈する前のありのままの経験の段階があることを明らかにするため、「純粹経験」とされたのです。

さて、物質を構成する最小の単位を素粒子と呼ぶと、この世界（宇宙）は素粒子から構成されており、私達人間という個体も、流動する素粒子の集合体となります。しかし、素粒子が集まって直接人間を構成するものではありません。まず、細胞という生物単位としてまとまります。一つの細胞は生存活動の為に、約百以上のミトコンドリアという生物を取り込み、共生しています。ミトコンドリアは、空気中の酸素と細胞からの栄養素でエネルギー

ギー源を産出し、二酸化炭素と排泄物を出しています。

私達は、自分が生きるために呼吸し、食事をして排泄すると感じています。自分の為にミトコンドリアという器官が機能していると思つています。しかし、私達はミトコンドリアに指示できるのでしようか？実は、私という個体ベースで、まとめて酸素を吸い二酸化炭素を吐くのは、三十七兆個の細胞と三千七百兆個以上のミトコンドリアという多数の生物が効率的に生存するために好都合なのです。そのために、人体という共同機能体を作り上げられたと考えるのが自然です。

私達は、食べ物の消化を助けるために百兆個の腸内細菌が生存していると思つていますが、腸内細菌が効率的に栄養を摂取するために、人間の身体機能を活用しているだけなのです。

個体レベルの人間は他の動物と同様に植物を食べます（植物を食べる動物を食べることもあります）。植物は太陽エネルギーと動物が吐き出した二酸化炭素によつて光合成を行い酸素を作り出しています。動物は、この酸素を呼吸で取り込み、動物の排泄物は植物の肥料になります（現代では、化学肥料なるものが登場しているようですが）。これらの動植物の営みが地球の大気圏を形成

し、雨を降らせ、海を作り、山を削り川を形成します。時折り、マグマが山を隆起させます。このような地球の循環活動は、恐らく太陽をはじめ宇宙のエネルギーに依るものでしょう。

おそらく宇宙の中で、素粒子は様々な集合体を構成しては分散しながら流動しているのです。宇宙とは、永遠に循環する素粒子の流動であり、ただ、始まりも終わりもわからないエネルギーによる生命活動なのです（エネルギー保存の法則）。

存在するのは、宇宙の生命活動だけであるのに、その小さな小さな一つの要素に過ぎない「人間」を一つの固定的な存在として区分けすることに、果たして何の意味があるのか？

私達は世間が実在しているように思っています、実はすべてが流動し、関係性だけで仮の姿を構成しているだけだとすれば、世間の物事に固執する意味はないのです。そもそも「自分」という個体が独立した意志を持つて生きていると感じることも虚像なのかもしれません。逆に考えると、宇宙の生命活動は、素粒子を様々な組み合わせで世界を創造していくエネルギーでもあるわけです。これら素粒子が組み合わされて創造された世界を

具体的に映像として可視化し、時系列的に整理する機能が人間には与えられています。眼や耳といった感覚器官や、脳や意識といった見聞覚知機能です。ただ、宇宙のエネルギーに依り流動する素粒子が私達の眼や耳にぶつかるという純粹経験が発生してから、経験的自我がそれぞれに世界を認識するまでには若干のタイムラグがあります。

純粹経験の段階を深層意識レベルとし、経験的自我の認識段階を表層意識レベルとすると、深層意識レベルでは、山も川も海もすべて連続した塊として存在しているにすぎないのに、私達の表層意識が適当に輪郭の線を加え、これは山だ、これは川だと名前を付けていくことで、世間という表層意識の世界を作り出しているのです。実質的に西田幾多郎の継承者とも言える井筒俊彦は、この世間の成立の為に「言語」というものが、いかに大きな働きを持っているのかに着目しました。言語の働きを掘り下げていきながら、私達の表層意識が考える「自分」とは何か、を言葉の無い深層意識レベルで明らかにしようと試みています。

経験的自我としての「私達」の「物語」によって構成されるのが、「世間」という表層意識レベルの現象です。

そこでは、人間関係や老病死は実在するものとされ、私達は苦しみから逃れることはできません。しかし、宇宙のエネルギーは既に深層意識レベルで人間の眼や耳などの見聞覚知機能を使いこなして、流動する素粒子の塊に過ぎない様々な事物をありのままの状態で把握しています。その直後、私達の意識が名前をつけて区別していくと表層意識レベルの世間が立ち上がっていくのです。言葉の無い純粹経験をそのまま捉えておくことができれば、ひよっとしたら、宇宙との一体感が沸き起こるのかもしれない。表層意識の底の深層意識レベルで宇宙のエネルギーが働いているのだとすれば、人間は皆、心の底で繋がっており、調和しているはずなのです。表層意識による世間で生きる一方で、深層意識が拓けば、表層意識の不安や苦悩から解放されるのではないか。先人は自らの体験を通して私達に伝えようとしているのかもしれない。

なお、西田幾多郎は次のように詠んでいます。

「わが心 深き底あり

喜びも 憂いの波も とどかじと思ふ」



イラスト/Aakane,t

人間 高柳健次郎 その転機

高柳記念電子科学技術振興財団

大森 悠生

一、はじめに

高柳健次郎は昭和元年（一九二六）十二月二十五日、独自開発によるテレビ用ブラウン管上に初の「イ」の字受像に成功し、戦後は日本のテレビ放送開始と普及に尽くした。また昭和三十四年には家庭用VTRの基本特許「2ヘッドヘリキヤルスキャン方式」を発明し、これが後のVHS方式・β方式開発に結びついて一大産業に発展したことは良く知られたことである。

それらの業績も評価されて昭和五十六年（一九八一）に文化勲章を受章。その時「これは私一人の力で成しえたことではありません」と謙虚に述べ、それまでに多くの方々から受けたご恩に報い、わが国の産業基盤構築のため電子科学技術の振興に些かなりとも貢献したいと念願して、私財を投じ、多くの方々のご支援を得て、昭和五十九年（一九八四）に高柳記念電子科学技術振興財団を創設した。

またその間には「創造」と「先見性」をモットーとして数々の新技術開発をすると共に、「よい科学者・技術者である前に、よい人間であれ」「協調性ある専門家集団こそ天才より大きな力を発揮する」「協力者への感謝の気持ちを忘れてはならない」と言った精神のもと、多くの若い人材の育成に努めた。そして最後まで「未来の幸せな人間社会のために」という強い思いを抱き続け、研究意欲も衰えることがなかった。

このように世界的業績をあげると共に、偉大なる人格者になったその転機は何処にあったのか。高柳健次郎の人間的側面から、あらためてその生涯をたどって見る。

二、母親と担任の先生の指導で目覚める

明治三十二（一八九九）年一月二十日に現在の浜松市に生まれた健次郎少年。小学生時代は虚弱でやせっぽち、勉強も運動も苦手で、あだ名は「お姫様」。自ら「落ちこぼれの劣等性だった」と言っている。その少年に最初の転機を与えたのが、母親みつと高等小学校担任の渡瀬晴吉先生だった。

母親は虚弱な健次郎を「何とか成功者にさせたい」

という思いで愛情を注いで育てた。その母親の愛情は後の健次郎にも影響を残し、「浜松の家で居ながらにして歌舞伎が観られるようになるはずだ」というテレビジョン発明の夢には母への敬愛の気持ちが込められているし、その後も「家庭あつての研究や事業だという考え方を守りきった」と言っている。

渡瀬先生は「この子は勉強が出来ないが、どこか良いところがあるはずだ」と観察して、粘り強さを引き出しつつ指導する。そのお陰で成績はトップクラスにまで伸びた。この体験から、「何事も粘り強く続けてやればだんだん出来るようになる」ことを会得し、長い研究生活を通してこの考えと姿勢を持ち続けたという。更に「どんな愚鈍な子も生き生きと輝いてくる」と、教育の尊さを知り、その後出会った思師方の教えを素直に受け入れて成長の転機を得て行つたのである。

この様に小学生時代の母親と教師こそが、以降の「高柳健次郎」へ向けて羽ばたく良き出発点をつくり上げたのである。

三、人の育成と創造の基本を学ぶ

静岡師範学校へ進んだ高柳は、内堀維文校長から教育の基本を学ぶこととなる。それはに教えると言うことではない。Educationの意味は、持つている良いものを引き出して育てることだ、という考え方である。高柳はそうように育てられ、これが後の高柳の人材活用の根幹を成し、多くの専門技術者や管理者の育成をするのである。

また物理の園田先生から、電気実験の授業を通して科学への目を聞かれ、「物事の根本まで追及することの大切さ」を学ぶ。そのお陰で未だエレクトロニクスが発達していない時代にも拘らず、「テレビ研究の時に電子で光を出そうと容易に考えついた」と言っている。同時に「新発見、新開発は物事の原理・原則をしつかり捉え、事実の追究から始まる」という「創造」の基本を身に付けるのである。

高柳の「創造」は決して天才的ひらめきによるものではなく、一つの着想からコツコツと積み上げて完成させる事例が多いのは、この教えの影響が大きいのである。

四、未来社会を目指した『志』と『感謝のこころ』

東京高等工業学校を卒業する時に、中村幸之助電気科長（後の東京工業大学初代学長）から「いま流行っていることをやっても駄目だ。十年・二十年先の日本になくしてはならない技術があるはずだ。そういうものを見出して今からコツコツやりなさい」と教えられ、また先見性の大切さを幸運の女神「フォーチュン」の例えで学ぶ。この教えに感銘を受けた高柳は、「自分のような愚鈍な者は、いま日の前に輝いているものを求めても他人にかなうわけがない」と自覚し、十年・二十年かけて研究して世の中に貢献するテーマを探す決心を固めるのだ。

これが大きな転機となるが、このときの決心が不動なものとなったのは一、二項に記した基盤があったからであろう。また高柳が天才でなかった（自ら凡人と言っていた）からこそ、この教えが転機となり得たとも言える。そして、この決心の大きさが、それから後の研究テーマ探しの時に見せた志の高さ、ラジオもない時代に描いた『テレビのある未来社会』という夢の大きさ、そしてその研究過程で示した何ものにも屈することのない執念の強さをもたらしているのであろう。

十年・二十年先を目指したテーマを探すために、高柳は独、仏、英、米四カ国の科学雑誌を三丁四種類ずつ取って読むことにするのだ。そのためにドイツ語を夜学へ通って学び、フランス語はフランス領事館で教わり、三年間分の科学雑誌を一度に予約した。更に海外の事情を知るために海外渡航まで試みる。その努力の結果、アメリカで始まったラジオの「放送(Broadcast)」なるものを知り、一カ所で電波を出して遠くへ声を送れるのなら、映像だつて無線でやれる理屈ではないか、と夢をふくらませて、これを「無線遠視法」と名づけるのだ。そして大正十二年七月、フランスの雑誌で「テレビジョン」のポンチ絵を見つけて驚き、「非常に難しそうだが、いま始めなければヨーロッパに負けてしまう。負けないようやってみよう」と、研究開始を決心する。そして母校（東京高等工業）の先生のご尽力で、郷里に新設された浜松高等工業（後の静岡大学）の助教授として赴任し、ここでテレビジョンの研究を始めることとなる。それは生涯をかけるテーマを求めて三年目、大正十三年のことであつた。このときの「テレビの研究をやりたい」という高柳と、それに驚く関口校長とのやりとりは有名な話であり、その時のことを高柳は、「一途に思いつめ

た私に対する校長先生の理解と支援は、まさに天佑というほかなかった」と述べ、「どんなに感謝しても、しきれない。その思いを以来抱き続けた」と述懐している。この経験が、常に感謝の心を大切にする高柳の人格をつくり、その人格が多くの協力者を得る力となつて後の数々の大きな仕事を成功に導いたのであろう。

五、ふくらむ夢と技術者の心構え

「電気之友」誌（大正十三）に記載された「無線遠視法」と題する一文がある。「私はペンを握つて 眼をとちた・・・」と書き出して、ふくらむ夢を描いた名文である。これを読むと、無線遠視法の研究は「テレビ」と言う「技術開発」ではなく、使う人々の幸せな姿を描いて、そういう社会の実現を目指した研究であり、だからこそ夢が大きくふくらんだのだということが良く解る。高柳は貧しい家庭で育ったが、決して金儲けが目的でもなかった。テレビ研究を志した時の、「これが出来たら浜松に居ながらにして劇場の歌舞伎を観ることが出来るだろう」と、大切に育ててくれた母親や叔母に見せたいという思いが、この文の背景にあったのである。

研究開発は何のためにするのか。その夢とは何なのか。単純だが忘れがちなその問いに対する答えをここから読み取ることができるのだ。そして後に高柳は「世の趨勢を知り、使う人の立場に立つてこそ研究は完遂できるのだ」という教えを残している。今で言うマーケットオリエンテッド、ユーザー指向をも包含した、もつと奥深い技術者の心構えを鋭く論じた言葉である。研究開発に妥協を許さない高柳健次郎ならではの教えだ。

さて、このようなふくらむ夢を抱いてテレビジョン研究に入ることになるが、「非常に難しいがやってみよう」と決めたテーマであるとは言え、極めて大きなそして多くの難関が待ち受けていた。しかしそれらを強い執念を持って一つ一つ乗り越えて行くのである。

「研究過程のこと」

テレビ用ブラウン管開発の苦勞

テレビの基本原理「走査と同期」の概念を發明

して「イ」の字受像に成功

動く被写体そして全電子式の開発へ向けて

撮像管研究の難関

外国の研究者（ツボルキン、サーノフ、

ベアードなど」とのこと

…ツボルキンに会って、研究開発体制すなわち

「専門家集団の力の大切さ」を知る

特許出願で苦い教訓

機械式テレビの追い上げと天覧の機会

静大とNHKを兼務して東京オリンピック目

指して放送開始準備

しかし…

六、戦争による挫折と研究再開への執念

昭和十六（一九四一）年、戦火の下、テレビ研究が中止となる。そして高柳は海軍技術研究所で電波兵器の研究に着くのだが、このときの挫折感を著書に「一つの時代は終わった。二十年かけて一つの技術を創りあげたのだが、戦火の下でそれを開花することが出来なかった」と記している。

そして戦後、テレビ研究再開に意気込む高柳はGHQからテレビ研究中止命令を受けるのだ。その内容は「テレビジョン研究は電波兵器研究と関わりが強いいため今後いっさいの研究まかりならん」また「軍部関係の仕

事をした者は、通信や放送などの公共事業に携わってはならない」（公職追放）というものだった。この命令を受けた高柳であったが、それに決して屈することはなかった。かつてテレビ研究を共にした部下約三十名と行動を一にする決心をするのだ。そしてテレビ研究再開を求めて民間企業への就職先探しに奔走し、二十余名を引き連れて日本ビクターへの入社を果たした。こうして研究再開への道を切り開いたが、焼け野原の中で思うように研究が進まない。外国からの遅れを取り戻すには「一人の力、一企業の力では不可能だ」として、昭和二十一年八月、テレビジョン同好会（現在の映像情報メディア学会）を設立、恐らく初の国を挙げての産学官連携態勢をつくったのだ。これはかつてツボルキンから学んだ「専門家集団の力」の実践であろう。

一方では、高柳はテレビジョン研究禁止解除を求めてGHQに三拝九拝する。来日したMITのコンプトン博士のGHQへの助言もあって、昭和二十一年末、有線に限定して禁止解除になる。しかしこれでは実用化研究にならないと、更に執拗に電波を使った研究の許可を求めてGHQを説得し続けて、ようやく1チャンネルの許可を得るのだ（昭和二十四年）。この研究再開へ

の執念は当初抱いた未来社会を目指した決心の強さ、夢の大きさ、それに加えて戦後の日本経済を再建するにはテレビジョン産業が必要だ、という強い思いによるものだった。

もしこの展開が無かったら、わが国のテレビ産業はどうなっていたであろうか。放送開始が大きく遅れただろうことは勿論、場合によっては米国の手による放送、米国から受像機を輸入という局面があったとしてもおかしくはない。

七、標準方式論争に見せた 高柳の研究開発姿勢

日本のテレビジョン標準方式決定段階で6MHz vs 7MHz論争があった。これは米国の方式（6MHz帯域）を主張する郵政省電波監理委員会と、将来のカラー放送の画質を考えて7MHz帯域とすべきと主張する高柳が中心となったNHK・メーカーグループが激しく対立した一件である。結果的には政府案に決定となるが、これは民間放送局の早期設立を考えて米国方式導入を主張した正力松太郎の力によるものであった。

このことを高柳は後々まで、「7MHz帯域にしておけば、

カラー放送がもつと精細になって視聴者がもつと満足したのだが」と残念がり、「相手が専門家だから、先進国だから、権威者だからと言って、盲目的に従つてはいけない」と述べている。そして「新しいことを始めるときには自分らのおかれた条件、社会での必要性を考えて、自分達で研究開発することが大切だ」と主張している。これこそ一貫した高柳の研究開発に対する姿勢の表れである。

その時も高柳式7MHzバンドが選ばれていたなら、後のカラーテレビ時代に至ってMUSE式ハイビジョン、クリアビジョン等々のステップを踏んだ日本のテレビ技術の歴史は変わっていたかも知れないし、後の日本のテレビ産業が米、欧を凌駕した実績から推して、欧州のPAL, SECAM方式選定に何らかの影響を及ぼしていたとしてもおかしくはない。

主張が実らず、挫折感を味わった高柳だったが、それから日本でのテレビ放送開始へ向けた熱意は衰えることなく、昭和二十八年に放送開始になったときには、「研究を始めて三十年、遂にテレビジョンが人々の暮らしの中にしみ透って行き始めた」と感慨を述べている。高柳はテレビジョンを始めとする映像関係の研究で

は知られているが、原子核研究用のリニアセクター（線型の粒子加速器）の特許を取得していることを知る人が少ない。この技術は大発明として、その後広い分野で活用されているのだ。これにはこんな逸話がある。戦後、占領軍が理化学研究所のサイクロトロン（円型加速器）を東京湾に投棄したのを聞いた高柳は、この技術はこれからの日本の基礎物理学研究に欠かせない技術であると激怒し、自らが研究し開発したと言うのだ。高柳の未来社会の為に、という研究姿勢は分野を問わず貫かれている。

八、先見性のこと

一九六一〜一九七二年頃のノートを見ると、平面受像管や大型投射装置など各種ディスプレイや立体視映像技術、走査線の見えないテレビなどの研究を行っているものが、これらのコンセプトが現在実用化されているものと同じであることは単なる偶然とは言えないであろう。またテレビ放送開始前から家庭用VTRが必ず必要になると予測して研究に着手し、その後基本技術を発明したのは前述の通りである。またその後はDVDなどビデ

オディスクが全盛期となるが、ノートを見ると早くも昭和三十八（一九六三）年にテープメディアの限界を予測し、“TVレコード”や“Disk VTR”と称してビデオディスクらしきものを着想していた。

これらはいずれも「十年二十年先・・・」という、かつて恩師から受けた教えを身に付けていたからこそ発想できたものであろう。そしてそれらの着想と研究の過程では、「一人の天才のひらめきより調和のとれた技術者集団の研究開発の方が成果が上がる」という遺訓のとおりに、その成果などを決して独り占めにはしなかった。着想があると直ちに部下に開示し、アイディアを募り、自らも更に考えに考え抜いて、可能性があれば特許を出願し、研究に着手している。かつてツボルキンから学んだこのグループワークは、全体としてのレベルを向上させると共に協力者も得て、困難と思われる課題を解決して行っただけである。その結果、自分が夢み、考案したものが実現できたことに対して、「そういう自分は幸せ者だ」と感謝の気持ちを表している。心の広い人格者らしい言葉である。

九、次世代への課題 「健全な未来社会の創造」

高柳が次世代に残した大きな課題がある。それは「健全な未来社会の創造」である。「テレビ事始」の巻末にこう記されている。「さて私はテレビ、VTR等の先端技術を開発し、新産業を発展させ、世界の文化の向上と経済の発展を図ってきた。しかし私はかかる形而下の発展だけでは人類は幸福にならぬことを知って、残念に思っている。人類が幸福になるには、物質文明と同様に精神上の文明が必要である」。そして、社会で起きている種々の問題や不祥事は「人の道に混乱をもたらすものだ」と未来への危機感を訴えている。

現状を見るに、残念なことにこの予測が当たっているように思われるが、これも先見性の一つと言えようか。そして最後に「私はまず善悪、正邪を検証できるような現代的な科学的な鏡がほしいと思う」と述べ、「多くの若い人々がこの課題に挑んで、世界の水遠の平和と繁栄を手にするのを期待するのである」と結んでいる。

「善悪、正邪を検証できるような鏡」とは何か。このような「科学的な鏡」はいずれは出来ようが、現代社会は最早それを待っている余裕は無いのかも知れない。

よい人間であることを重んじつつ、幸せな未来社会の創造を目指して大事を成した高柳がやり残した「健全な未来社会の創造」。そのための物質文明と両立する精神文明の発展。この両立こそ、我々次世代が成し得なければならない高柳から与えられた大きな課題であり、また未来においても恒に心しなければならぬ人類社会にとって極めて大切な課題であろう。

十、むすび

ここに記したことは高柳の生涯のほんの一部分に過ぎないが、静岡大学、NHK、海軍研究所そして日本ビクターで多くの方々々と仕事をしてきた中の諸々の記録を見ると、常に未来を見据え、協調を重んじ、決して驕らず、協力者への感謝の気持ちを忘れずに、多くの方々から親しみ慕われる姿が浮かび上がってくる。

日本ビクターでも部下たちから「おじいちゃん」と呼ばれ親しまれていたが、一方では口角泡を飛ばし、大激論をする姿を何度か目にすることがある。それは仕事に対する妥協を許さない真剣な姿である。そのおじいちゃんに、技術者としての、また人間としての信念や心構

えについて教えられた者は多い。

昭和四十八（一九七三）年に現役を引退したが、その後も日本ビクターの技術最高顧問として後進の指導をした。そのとき、私も仲間と共にご自宅を訪問したことがある。いろいろと教えを請うたけれど、最も驚いたことは、「映像は名人が描いた絵画の如く、人に感動を与えるものでなければならぬ」と言い、「脳細胞と色彩認識の研究を始めたよ」と自宅で研究活動を進めていたことである。老いてもなお人類のため未来に向かった夢を持ち続け、研究意欲衰えない八十六歳のその姿を見たときは感銘を受けた。

その研究の経過を記した数十冊のファイルが残っている。晩年の十年間に及ぶ「色順応」を中心とした研究ノートであり、これは孫の吉村真氏が現在分析中である。そこでは「色覚を正しく知ることは、良い色の再現や芸術鑑賞に重要だ」という観点から、自分が考案した方法の実験に基づき、数式を駆使し、「新色順応式」を導き出している。八十歳を過ぎた老人とは思えない緻密な内容であり、この研究は逝去される二年前、八十九歳まで続けられているが、残念なことに論文の完成を見ず終わっている。

本文執筆にあたり、著書「テレビ事始」、(財)浜松電子工業奨励会編「テレビジョン技術史」及び高柳健次郎先生の研究ノート、業務日誌その他の執筆物、新聞・雑誌の記事などを参考にし、一部引用した。

文中に記憶違いによる錯誤、調査不足などもあるかと思うが、それらをご指摘頂けたら有難い。

二〇〇八年二月

追記

高柳先生の後輩である故大森昇氏からの依頼で、氏が主宰する神奈川県田名市のシニアパワーの会で「日本人に語り継ぎたいことば」と題して、高柳先生の教えについて昨年二回にわたって講演した。この文章は、その後大森氏から「人間・高柳健次郎をもっと日本人に知らしめるべきである。自分もそのために尽力したい。ついでに、高柳がどのようにして偉大な人物になったのか、その転機について書いて欲しい」との要請を受けて記したものである。

しかし、大森氏はその思いを遂げることなく、今年七月に逝去された。

二〇〇八年九月

表紙リニューアルにつきてまして

大森老大師三十三回忌を来年迎えるにあたり、ささやかながら記念事業として、ホームページの刷新、大森老大師御著書「禪の真隨」復刊を行って参りました。更に、現会員の志を表顕するようなシンボルをと思い、各方面に依頼しておりました。

そのような中、灯台もと暗し、熱心な禅会員である廣瀬祐子さんがデザイナーであると知り、改めて依頼したのです。当初はシンボルのつもりでしたが、原画の大きなスケールと気迫を感じ、すぐさま鉄舟誌の表紙にと思い立ちました。

鉄の舟に押し寄せる波をイメージされたとの事でしたが、鉄の舟から世の中へ波を発する力をも感じます。また、大森老大師の時代から続く、剣禅書茶による動静一如の精神も良く表れていると思っております。

原画のイメージをどれだけ忠実に再現できたかは今後の課題でもあります。突然のリニューアルで皆様を驚かせてしまうことになるかもしれません。紙面を借りてお詫び申し上げます。現会員の意気を感じ頂き、お許し賜れば幸いです。

垣塚玄了 会員一同 羅拝

高歩院 補修報告

三月十四日（金）の夜、道場二階の東司の小便器のフラッシュバルブが破損し、一階玄関の天井裏に水が漏れ変色する事態となりました。



当日中に業者に応急処置をしてもらうと共に、皆が出入りする場所の安全を確保するため、本格的な補修工事を依頼しました。

四月の接心中の十九日（土）・二十日（日）の二日間
で工事を実施し、綺麗な天井に仕上げる事ができまし
たので、ご報告申し上げます。



道場裏手の物入れに、棚と固定用のバンドを取り付
けました。接心時に高歩院と道場をつなぐための踏み台
などを保管していますが、整理して収納できるようにな
りました。（製作・山田貫堂）



ご寄稿のお願い

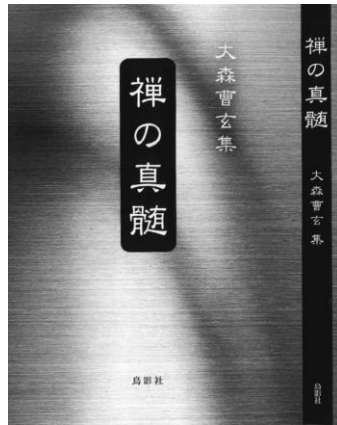
本誌編集部は、読者の皆様からのご寄稿を広く募集
しております。文字数などに制限はございませんが、誌
面の体裁を整える上で多少の手直し、校正の可能性があ
りますことをご了承ください。寄稿を希望される方は左
記の鉄舟会メールアドレスに是非ご連絡ください。

teshukai@gmail.com

『禅の真髓』復刻のお知らせ

大森曹玄老大師の三十三回忌記念事業と致しまして『禅の真髓』を復刻いたしました。

鳥影社より定価二七五〇円（税込）で発売されております。ご希望の方はどうぞお問い合わせ下さい。



【編集後記】

今号から鉄舟誌の編集を中村稔前編集長から引き継ぎました。表紙を一新してのスタートとなりましたが、ぜひ諸先輩方のご批評を賜れば幸いです。よろしくお願いたします。

（田波）

鉄舟禅会 行事予定

令和七年 八月

二日（土）	親子坐禅会	八時～	十一時半
二十四日（日）	日曜禅話会	八時～	九時

同 九月

六日（土）	土曜坐禅会	八時～	十一時
十三日（土）	土曜坐禅会	八時～	十一時
十七日（土）	土曜坐禅会	八時～	十一時
二十日（土）	土曜坐禅会	八時～	十一時
二十七日（土）	土曜坐禅会	八時～	十一時
二十八日（日）	日曜禅話会	八時～	九時

同 十月

四日（土）	土曜坐禅会	八時～	十一時
十一日（土）	土曜坐禅会	八時～	十一時
十八日（土）	土曜坐禅会	八時～	十一時
二十五日（土）	土曜坐禅会	八時～	十一時
二十六日（日）	日曜禅話会	八時～	九時

諸事情により予定が変更になる場合がございます。
随時、ホームページでお確かめください。

<https://kohon.org/>



令和七年七月十七日 発行
 発行 鉄舟禅会
 編集 鉄舟禅会出版部

東京都中野区中央一―一七―三
 電話〇三(五三三八)九三〇

印刷 恒信印刷株式会社

東京都板橋区板橋一―二八―八
 電話〇三(三三九六四)四五二―

*乱丁・落丁本がございました場合
 はお取り替えいたします

「鉄舟会理事会」郵便口座
 00190131579820